

## 『資本論』と格闘する長生先生の

### ついでに言葉に誘われて その三

#### 宮川彰先生から頂いたメール

東京で毎月第一日曜に開かれている「御茶ノ水ゼミ」（この名称は通称で正しくは東京学習会議主催の「資本論草稿講座」）に参加した際、メンバーの方数人と講師の宮川彰先生に「江木山荘文集第二号」をさし上げたところ、一週間ほどして宮川先生から望外の励ましのメールを頂いた。

『江木山荘文集』No2の、エッセー、クイックリー夫人探索記をおもしろく拝読いたしました。まだ入り口で、これから本論がはじまるうというわけですね。この件では、①数年前、埼玉教室だったか、当該の箇所をコメントしたときに、

シエイクスピア愛読者の受講生から、『ヘンリー四世』では見当たらない、もしかしたら他のバージョンがあるのではないかと指摘を受けたことがあります。②自宅にある中公「世界の文学」のなかのシエイクスピアの巻におさまった作品からはわりに容易に見つけ出した記憶があります（あとで確かめ必要）。③以前川上重人さん（民主主義文学同盟）から、『シエイクスピアは「資本論」のなかでどう描かれたか』（本の泉社、二〇〇一年）を献本され読んだことがあります。『資本論』のおもだったシエイクスピア台詞の引用をエッセー風に取り上げています、もちろんクイックリー夫人言及も。今度お会いするときに、川上重人著を持参します。」と書かれていて、翌週の「埼玉資本論教室」でお会いした折に中央公論社版の『世界文学全集3』に収録されている『ヘンリー四世』（福田恒存訳）第三幕第三場のコピーを頂くこととなった。

この訳本を読んでもみると、私が入手して対訳を作ってみた（新日本新書版『資本論』の訳注で紹介

介している)小田島雄志訳と大分異なり、原書の中世的雰囲気をも再現するかのような趣あるもので、フォールスタフのセリフも小田島訳では「かわうそうなやつ」と駄洒落のように訳されているが、福田恒存訳は「川瀬さ」と直訳してある。これならば、『資本論』で引用されている「クイックリー夫人と区別される」という意味を考えるヒントが更に手に入るのではないかと思った。そこで、「マルクスが読んだシェイクスピア」をさらに深く知るためにもこの訳を丁寧に読んでみる必要を感じた。前号に続き相当長くなって恐縮であるが、福田恒存訳を使って「マルクスの真意」の一端を引き続き探ってみたい。

### 戯曲『ヘンリー四世』とは

戯曲『ヘンリー四世』はシェイクスピアが一五九五年頃に書いたもので、初演は一六〇〇年三月であるというから、マルクスが『資本論』第一部を完成・出版(一八六七年)した時から二百年も

遡る時代の作品である。第一部(一五九八年出版)と第二部(一六〇〇年出版)があるが二つは継続して書かれたものではなく、二年近くの時間を要して書いているのだという。戯曲の性格は王族の悲劇『ハムレット』とは異なり、王政・貴族社会のパロディふうの、喜劇的要素の濃い歴史劇とも言える作品である。また、戯曲は、後にヘンリー五世となる王子(ヘンリーの愛称でハルと呼ばれる)の放蕩三昧に同行して悪行を重ねる中心人物である巨漢の無頼貴族フォールスタフに実在の人物(初演時はジョン・オールドカスルという名前であった)がいたところから、その子孫による激しい抗議があったといういわくつきの作品でもある。そのためか、第二部の最後の「エピローグ」は「踊り手の一人が述べる」という一人語りで終わるのであるが、わざわざ「かのサー・ジョン・オールドカスルは殉教者として死にました。だが彼はフォールスタフとは別人です」(『ヘンリー四世』第二部小田島雄志訳・白水ブックス新書版二〇七頁)と語らせている。シェイクスピア

もかなり気にしていたことがわかる。しかし、にもかかわらず当の貴族達から絶大なる称賛を獲得したのだから面白い。

戯曲の第一部第一幕第一場は、イングランドの宮廷でのヘンリー四世の「われらは驕りに身をふるわせ、心痛に病み蒼ざめている。」(小田島雄志訳『ヘンリー四世』白水ブックス八<sup>六</sup>)という韻を踏んだ散文詩風の語りから始まる。

物語のメインテーマはヘンリー四世から五世に代わる時代の歴史・戦争史の一端を描いてゆくもので、インターネット上の辞書であるウイキペディアによれば、第一部のごく大まかなあらすじは次のようなものである。

「イングランド王ヘンリー四世となったヘンリー・ポリングブルックだが、その地位は盤石とは言えなかった。リチャード二世を廃位させて王冠を得たことへの王自身心の動揺を十字軍遠征で解決しようとしたが、スコットランドおよびウェールズ両国境での騒乱によってそれもできずにいた。罪の意識はさらに、ヘンリー

四世が王位に就くのを助けたパーシー家のノーサンバランド伯ならびにウスター伯、先王リチャード二世から正当な王位後継者との宣言を受けたマーチ伯エドムンド・モートイマーを冷遇した。

重ねてヘンリー四世を悩ませていたのが皇太子のハル王子(後のヘンリー五世)だった。ハル王子はごろつきどもと居酒屋などで遊び回っていた。ハルの一番の親友がサー・ジョン・フォルスタッフで、デブで香兵衛で、もう若くもないが、そのふてぶてしい生き様は、格式ばった王宮で生きてきたハル王子には魅力的だった。

向こう見ずで勇敢なハリー・ホットスパー・パーシーは、父親のノーサンバランド伯、叔父のウスター伯、それにスコットランドのダグラス伯、モートイマー、ウェールズのグレンダワーと共謀して、ヘンリー四世に対して反乱を起こした。

ハル王子はヘンリー四世と、そしてフォルスタッフも道中徴兵をしながら(しかし実は、兵役逃れの賄賂で懐を肥やしながら)、戦場であるシュールズベリーへ向かう。

その戦場でハル王子は同じ名前(ハリー)のホットスパー

ーと一騎打ちの末、倒し(フォール)スタッフはそれを自分の手柄に見せかけようとし)、戦いは(ヘンリー四世の勝利)に終る。』(ウィキペディア『ヘンリー四世』より)

このあらずじを読む限りでは、クイックリー夫人の登場場面は無い。しかし、『資本論』の引用にかかわるクイックリー夫人はフォールスタッフの傍若無人ぶりを描く「猪首亭」という居酒屋でお目見えする。場所はロンドンのイーストチープ(チープは通りの事で、直訳すれば「東通り」、バッキンガム宮殿からテムズ川沿いに五<sup>キ</sup>ほど東に下ったところに現存する)

ところで、原作の第二幕第三場は、「The Boar's Head Tavern」と書いてあり、小田島訳も福田訳も「居酒屋」と訳している。しかし、先立つ第二幕第四場も同じ場所設定であるが、登場する王子のセリフを読むと、この「居酒屋」には地下にワイン貯蔵庫があり、建物には二階もあって番頭、給仕、居酒屋の亭主(クイックリー夫人の夫)なども顔を出す。そして、フォールスタッフとその従

者はここ『猪首亭』を根城に悪行を働いていることもわかってくる。それらを考えるとわれわれが普段訪れる「居酒屋」や「赤提灯」とはまるで趣を異にするようである。「居酒屋を兼ねた宿屋」と訳すべきではないだろうか。ヴェルディ作曲のオペラ『ファルスタッフ』の解説では「宿屋兼居酒屋」と翻訳されている。ちなみに英和辞典(新コンサイス英和辞典)を引くと、Tavernは「(英古・米)居酒屋」と書かれているが、「(イギリス)宿屋」とも書かれている。

とまれ、私の探求対象であるクイックリー夫人は、この「宿屋兼居酒屋」や「街路」での出来事を描くエピソード、第一部では第二幕第四場と(イーストチープの居酒屋ボーズヘッド)と第三幕第三場(イーストチープの居酒屋ボーズヘッド)。第二部では第二幕第一场(ロンドン、街路)と第四場(ロンドン、イーストチープの居酒屋ボーズヘッド)第五幕第四場(ロンドン、街路)に登場する。そして前回から探求の俎上に載せている『資本論』の「商品の価値対象性は、

どうつかまえたらいいかわからないことによつて、寡婦のクイックリーと区別される」(『資本論』新日本新書版第一分冊 八一頁) というフオールスタフの台詞(ゴシック部分) は第一部第三幕第三場で発せられているものである。

### 台詞を吟味すること

では、マルクスによつて引用されたフオールスタフのセリフを前記の宮川先生より頂いた福田恒存訳によつて検討してみよう。焦点の第三幕第三場は、イーストチープ(東通り)にある「猪首亭」という宿屋兼居酒屋(クイックリー夫人が女主人)でのフオールスタフとその従者バートルフのやり取りから始まるが、クイックリー夫人の登場する場面から読んでみると、どうやらフオールスタフが「財布が盗まれた」と騒ぐ事件が直前にあったらしいことがわかる。

### 「女将登場

フオールスタフ これ、これ、牝鶏バルトレ奥様え、俺の財布を掏った奴をお調べ下さいましたかね？

女将 これは驚いた、サー・ジョン、何を考えておいでなのだい？ 家では盗人を飼っているとでも思っておいでかい？ 私は家中捜し回り、片端から問い匡してやりましたよ、家では今まで何も無くなった事なんかありはしなかった、髪の毛一筋だって、その十分の一だって。

フオールスタフ 嘘を吐け、女将——バートルフが丸禿になった事があるではないか、原因は何だか知らないが、髪の毛がぞろぞろ抜けてしまった、間違いない、俺の財布を失敬した奴がいるのだ、やい、やい、この尼つちよ、正直に言え。

女将 誰のことだい、私がかい？ とんでもない、おぶぎけでないよ、尼つちよだなんて、憚りながら家の店でそんな風に呼ばれたことは後にも先にもありはしないんだから。

フオールスタフ 止せやい、俺はお前さんの事は何から何までよく知っているのだ。

女将 嘘をお言い、サー・ジョン、何も知ってはいない癖

に、サー・ジョン。私の方はお前さんというものを良く知っているんだ。お前さんは私に借りがある、サー・ジョン、それだものだから、私に言掛りを附けてごまかしてしまおうという気なんだ。私はお前さんにジャツ一ダース分立換えてあげた事があつたね。

フォールスタフ ダウラス産の奴か、あんなけちなダウラス・ジャツをね。あれは皆くれてしまつたよ、パン屋の女将連に、皆はそれで飾(ふるい)を拵えたとき。

女将 私はね、これでも嘘をついた事は無いんだよ、あの裂(き)れは一エルでハシルもするんだ！ そのほかにもこの店の貸があるんだよ、サー・ジョン、食事代や酒代が溜まっているし、現金だつて二四ポンドも貸してある。

フォールスタフ その中にはこいつの分もはいつている、こいつから取ってくれ。

女将 こいつからだつて？ ふん、こいつは素寒貧だ、何も持っていないよ。

フォールスタフ へえ！ 素寒貧だと？ こいつの面を見て見ろよ。お前さんが金持ちというのは一体どういう奴なのだ？ この鼻で金貨を造らせたら良い、この類

で。俺は鏝一文だつて払わない！ そうかい、お前さんはこの俺を勤当息子扱いしようというのだな？ 棲み慣れし家に在りても心安からずという目に逢わせたくて、俺の財布を盗ませたのだから？ あの中には俺の祖父の印形の附いた指輪がはいつていたのだ、四十マークもする奴が。

女将 よくもまあそんな！ 王子様が言つていたよ、それこそ何度聞いたか憶えていない位だ、その指輪は赤銅(あか)だつてね。

フォールスタフ へえ！ その王子様はやくざ野郎だ、胡麻播りの小悪党だ。畜生め、もしここにいようものなら、犬のように打ちのめしてやるんだが、よくもそんな事をぬかしやがつたな。」

ここまで読んで二人の言い合いを吟味してみると、無頼の貴族(クイックリー夫人がサーを付けて呼んでいる)フォールスタフが「財布が盗まれた」と因縁をつけて来たのに対して、夫人は即座にその真相を暴こうと反撃に出る、それはまさに名前通りにクイックリーだということが良く

わかる。このキャラクターの基本的性格付けは前号で紹介したオペラ『フォールスタッフ』ではさらに鮮明であるが、この場面でも痛快で、小気味のいいセリフは歌舞伎のタンカのように、フォールスタッフもタジタジであるから、当時の観客に大うけしたのであるうことが想像できる。

これに続く場面は、ハル（フォールスタッフと組んで放蕩と悪行を重ねる王子——後に第二部終幕では即位してヘンリー五世となる人物）が登場するところから、二人の言い合いが三人のやり取りに代わってゆく。ここがマルクス引用のセリフ部分になるので、詳細にチェックしてみよう。

「その時、王子登場。ポインズ（フォールスタッフの従者）もその後にならって行進して来る。フォールスタッフはそれを見て、直ぐ迎え腰の棍棒にて横笛を吹く真似をしながら、三人で部屋中を行進する。バードルフ（フォールスタッフの従者）もポインズと並んで行進に加わる

フォールスタッフ おい、おい、小僧！ いよいよさういう

風の吹き廻しと相成ったのかい？ 皆、揃ってお出掛けという訳か？

バードルフ 二人ずつ縛られてね、ニューゲイト監獄に送られる時はさうだってよ。

女将 王子様、是非、私の話を聴いて下さいまし。

王子 何が言いたいのだ、クイックリー？ 亭主は元氣か？ 俺はあの男が大好きだ、正直者だからな。」

この王子のセリフから考えても、女将クイックリーの夫は健在という事になるし、前述したように第二幕第四場には「居酒屋の亭主」が登場している。とすれば、新日本出版社版『資本論』の訳者注が「寡婦のクイックリー」となっているのは誤訳ではないかと考えられる。

「女将 王子様、私の話を。

フォールスタッフ まあ、この女の事は放っておいて、俺の話を聴いてくれよ。

王子 何だ、お前の話というのは、ジャック？

フォールスタッフ この間の晩、俺はここで寝込んでしまっ

ただろう、それ、その壁掛けの後ろでよ、あの時、財布を盗まれてしまった。この店は淫売屋に鞍替えしてしまつたのだ、枕探しまでやりやがる。

王子 何を獲られたのだ、ジャック？

フォールスタフ それが、あろう事か、ハル、四十ポンドの手形三、四枚と祖父の印形の附いた指輪だ。

王子 そんな簾物、精々ハペンス位の物だ。

女将 私もそう言ったのでございますよ、王子様、はい、王子様もそう言っておいでだつて、そうしましたら、王子様、この人は王子様の事をさんざん毒づきまして、ご承知の通り、それはもう口汚いことを次から次へと、揚げ句の果てに、王子様を叩きのめしてくれらなどと申しまして。

王子 おい！おい！まさかそんな事は？

女将 それが嘘なら、私は信仰の無い不真面目な女だという事になります、いいえ、そうだったら女とは言えません。」

クイックリー夫人から素早く手厳しい追及を受けたフォールスタフは、この「女とは言えませ

ん」という言葉尻をつかまえて反撃に出ようとす。これから始まる二人の応酬はとりわけ面白いので、きつとマルクスお気に入り場面であつたであろうことが想像できる。そして、この中のフォールスタフのセリフを「価値対象性」の認識の難しさ（言うまでもなく、マルクスは「価値対象性」を既に完璧に証明し判っているのであるが）を説明する引き合いに出したのである。

さらに吟味を進めよう。

「フォールスタフ お前に信仰があるなら、女郎屋の女将にだつてある、お前が真面目なら、狐だつて真面目だ——最後に、女という事になると、メイド・メーリアンのような悪女だつて、お前より余程まともにも町のお歴々の奥様役が務まるだろうよ、さつさと引こまないと目に物見せてくれるぞ。」

女将 どんな物をみせてくれるんだよ、何だよ、その物というのは？

フォールスタフ どんなものだと？ それは、つまり神様が御覧になりたいような物さ。



女将 神様が御覧になりたいような物なんて、私には勿体無い、見せてくれなくて良いよ、本当に余計なお世話だ、私は真面目な男の女房なのだよ、お前さんの方は、騎士とは名ばかり、私に言わせればただの「ごろつき」。

フォールスタフ お前も、女とは名ばかり、手取り早く言えばただの獣々。

女将 それなら言ってお覧、何の獣だ、この「ごろつき」め、さ、言ってお覧？

フォールスタフ 何の獣だと？ それは、川獺（かわうそ）さ。

王子 川獺だと、ジョン！ どうして川獺なのだ？

フォールスタフ どうして？ それは、魚でもなし四足でもなし、どの種類に属するかあしらいかねるからさ。

このフォールスタフのセリフの一部が『資本論』のなかに「どうつかまえたらいいかわからない」と訳されて引用されている。原文は「*Fal Why, she's neither fish nor flesh: a man knows not*

*where to have her.*」である。

言うまでもなくシェイクスピアの書く英語は「古典英語」で現役の英語専門家でも相当難しいのだという。前回の拙文で紹介したイギリスBBCの作成した『シェイクスピア劇場』を放送した際に出版された『NHKシェイクスピア劇場 ヘンリー四世第一部』（一九八二年発行）の解説（玉泉八州男）には、「*neither fish nor flesh*」は「難解な個所。表の意味（魚肉と獣肉）は明らかだとしても、*'flesh'*の裏の意味がならずしも判然としない。「身体の一部」が湿っている魚（＝女）でも獣（＝男）でもない」というのか、単に「商売女でも遊び相手でもない」（*fish flesh*）ともに *prostitute* の意味がある」というのか」と書いている、シェイクスピアの言葉遊びの深さと面白さが見えてくる。

舞台はその後、このフォールスタフの執拗な言い掛かりが、クイックリー夫人と王子の言葉によって撃沈されるが、「財布盗難事件」は思わぬ結末となる。完璧を期して引用をさらに続けよう。

「女将 能くもそんな事が言えたものだ、お前さんだって誰だって、私をいつも良いようにあしらっている癖に、このごろつきめ！」

王子 全くお前の言う通りだ、こいつの悪口は如何にもひどすぎる。

女将 そうなのでございますよ、王子様の事までそんなのでして、この間も千ポンド借りられたなどと。

王子 やい、本当か、俺に千ポンド貸してくれたというのは？

フォールスタフ 千ポンドだって、ハル？ 百万ポンドだ。並の人間ならいざ知らず、お前さんに対する友情は百万の値打ちがある。つまり、お前さんは俺にその友情の借りがある訳だ。

女将 それに、王子様、こいつは王子様の事をやくぎ野郎だ、今度遭ったら打ちのめしてやる、そう申ししております。

フォールスタフ 俺はそんな事を言ったか、バードルフ？

バードルフ うむ、サー・ジョン、そう言ったよ。

フォールスタフ それは、俺の指輪が赤銅だなんて、もしハルがそんな事を言ったらのはなしたよ。

王子 そうさ、赤銅さ。で、お前は自分の言った通りやってのける気か？

フォールスタフ それは、ハル、決まっていらあな、お前さんがただの人間なら、俺はやってのけるさ、だが、王子ともなれば、仔獅子の吠え声程度には気を遣うよ。

王子 なぜ獅子とは言わないのだ？

フォールスタフ 恐るべきは獅子の如き王だけだよ。俺がお前さんの親父さん並に怖がっていると思っているのかい？ とんでもない、そんな俺なら、神様、どうか不幸の前兆をお与えくださいまし。靴の紐でも帯でもきれてしまえば良い。

王子 帯が切れたら大変だ、その腹の中の臓物が膝の上に垂れ下って来てしまう！ だが、その腹の底を掻き分けて見ても、お前の中には信仰だの真実だの正直だの、そんなものは薬にしたくともありません。あるのは臓物と粘膜だけさ。正直者の女将に因縁を付けるとは何という根性だ！ 全く呆れて物も

言えない、窮鼠猫を噛む厚顔無恥の水膨れ野郎、お前の懐にあるのは居酒屋の勘定書きと、淫売屋の覚え書と、それから太っちょの息切れを防ぐ甘い駄菓子と、精々それ位のものさ……もしその他に被害の何のと大きな事言えるものが入っていたらこの首をやる。

それでもまだ頑張る気か、嘘の財布の紐を締めようとしなのか、どうだ、恥ずかしいとは思わないのかい？

フォールスタッフ お前さん、聞いた事があるだろうな、ハル、アダムは全く罪というものを知らないで暮らしていたのに、それでも楽園を追払われたろう、して見れば、この極悪非道の末世に生きているジャック・フォールスタッフはまさに憐れむべし、一体どのようにしたら良いのだね？ 御覧の通り、他の人間よりは大部分が豊富だ。随ってそれだけ弱みも豊富という事になる……ところでお前さんの問はず語りを聴いていると、どうやら盗んだのはお前さんらしいな？

王子 話の筋道から言うと、どうもそうらしい。」

思わぬ展開である。なるほど財布の中身を正確

に知っているのだから、王子がフォールスタッフの財布を掠めた『真犯人』ということになる。そして、それを王子も認めている。

そして、フォールスタッフは「降参」となる。

「フォールスタッフ 女将、お前は無罪放免とする。さ、朝飯の支度をしてくれ、汝、須らく亭主をかわいがり、召使に目を掛け、客を持って成すべし。良く心得ておけ、俺は筋の通ったまともな事なら、話の解る男なのだ、見ろ、この通りいつでも機嫌を直す。な、もう良いだろう？ 早く奥へ行きな。」

女将退場（引用は、中央公論社版「新集 世界の文学1 シェイクスピア 福田恒存」1969年）

大分引用が長くなって恐縮であるが、ここまで丁寧に読み込めば、マルクスの読んだ『ヘンリー四世』の雰囲気、なかなしくクイックリー夫人とフォールスタッフの性格と考えが正確に理解できるのではないだろうかと思ひ、頂いたコピーを見ながら必死で文字入力してみた次第である。

## 川上重人さんの文章について

宮川先生から福田恒存訳のコピーを頂いてから数日後、再度メールを頂き、川上重人著の「シエクスピアは『資本論』のなかでどう描かれたか」から『ヘンリー四世』に関する部分のコピーを添付して下さいました。面白かったので他の部分も全部読んで見たいと思いい書店手配、入手後この部分を再読してみると、それは私がいままで『ヘンリー四世』と『資本論』との関係を探ってきて見えてはじめてきたことと、大分違うのである。まずは、関係箇所を紹介しよう。「ちがう」と感じた部分を太字にして示してみた。

『資本論』に初めて姿を見せるシエクスピア作品は『ヘンリー四世』第一部であり、右に紹介したようにこちらとその片鱗をのぞかせるだけである。

「商品の価値対象性は、どうつかまえたらいいかかわらないことよって、寡婦のクイックリーと区別される」

やがて英国の王となる王子ハルのちのヘンリー四世は、ロンドンの安酒場にフォルスターフなどの遊び仲間と入りびたり乱行に耽る。クイックリーとは、その酒場のおかみのことである。

この記述でわかることは、価値対象性は「どうつかまえたらいいかかわからない」が、クイックリーはそうではないということだろう。(①) この「わからない」の文脈を真面目に論じるのは憶してしまうが、逃げてしまったのでは何も書けなくなってしまう。

この場面はヘンリー王子の飲み友だち、遊び友だちのフォルスターフ(②)が酒場のおかみクイックリーを「この化け物」と罵り、彼女は「あたしは別に化けたりしてませんからね、はつきり言っとくけど。あたしはこれでもまともな男の女房なんだ。そう言うあなたなんか騎士だってことを別にすればただのごろつきじゃないか」と反撃する。

しかし、フォルスターフは「この女は魚でもないし、四つ足でもない、どの種類に入れていいのかわからないカワウソウなしろものだ」(カワウソウは可哀想にかけた駄洒落(③))と毒つく。つまり、商品の価値対象性

は、どんなに一つひとつをひねくりまわしてもつかまえないが、クイックリーはカワウソに化けた女であることをフォルスターによって「つかまえ」られてしまったということか？ (④) このようにとらえたのではおもしろくない。

マルクスの場合、シェイクスピア作品に限らず、他の重要なことをことばとはまったく反対の意味で、時間もじりとして、時に資本家への皮肉をこめて表現することがすくなくない。ここでもフォルスターはクイックリーをつかまえるのにあまり勝手すぎる屁理屈をもちだしている。ということは、クイックリーは商品の価値対象性と同様にどこをどうつかまえたらいのかわからないと解釈するのが妥当であるように思う。

(⑤) なせなら、フォルスターはクイックリーを、俺の女だと思っつかまえたつもりで、もてあそんでいるが、彼女はフォルスターにけつして心をゆるしてはいない。たとえ肉体を売ったとしても魂までは売ってはいない。そのようなクイックリーのたしかな意思が隠されているように思えた。(⑥) (川上重人著「シェイクスピアは

『資本論』のなかでどう描かれたか」本の泉社版)

では、感じたままに検討してみたい。

① このようにマルクスの叙述をとらえることには違和感がある。なぜなら、「価値対象性」という概念、なかんずく「対象」とは「広辞苑」によれば「① (「哲」) (object) 英・Gegenstand) 認識や意思などの意識作用が向けられる当の物。物的・心的・実在的・観念的なあらゆるものが対象となりうる。② 目標となるもの。③ 客体・客観とほぼ同義」とある。また、一九七一年に発刊された『哲学辞典』(青木書店版/企画・古在由重/企画編集・森宏一)では、「対象」について次のように書いている。「対象 object 主観に對立し、主観の認識活動がむけられるものをあらわす哲学概念。対象は主観の相関物である。唯物論では、客観的事物は主観とのかかわりにおいて対象となるが、客観的事物じしんは主観とはかかわりなしに存在すると考える。」

つまり、「価値対象性」とは平たく言い換えられ

ば「商品体の中には、交換価値の内実として価値（抽象的な労働の分量）というものが客観的に存在しているのだ」ということである。しかもここで注意しなければならぬ肝要な点は、当のマルクスは「とらえどころがない」ことに困っている訳ではなく、「労働の二重性」の発見によって、すでに完璧に証明済みであり、あとは読者に理解してもらおう方途を探っている局面での発言、だという事である。

② フォルスターフとその従者、王子のグループは「飲み友達」というような「仲良しグループ」ではなく、放蕩する王子と巨漢の無頼貴族が一体で悪行を働くのであって、これは、王権・貴族社会の腐敗と横暴を象徴するパロディの中心をなすものではないだろうか。

③ 原文では駄洒落としては使われていない。（福田恒存訳でも同じ）原文から感じる二人の言い合いは、川獺の生動的な特性（哺乳類なのに両生類のよう）が後のやり取りに続き、「どうとらえたらいいか」（魚か獣か、男か女か）と発展し

てゆくこと自体に比喩的展開の面白さがある。

④ 「川獺」＝「川のものか陸のものか」↓「魚か獣（けだもの）か」↓「男か女か」↓「どう抱いたらいのか」などさまざまな想像を膨らませる様なフォルスターフの台詞は、クイックリー夫人に手ひどくやり込められたことへの反撃、八つ当たりのように発せられた理不尽なものである。そのことは後の王子のセリフでも明白になる。したがって、「化けている」という解釈も「つかまえられるってしまった」という解釈も成り立たないのではないだろうか。また、①でもふれたように、マルクスは価値対象性（価値の实在）を「どうひねくりまわしてもつかまえない」と困っている訳ではない。「理解することに困難がある」と読者に注意し、引用の文章に続く部分でとらえる極意、「商品の価値対象性は純粹に社会的なものであること」を力説しているのである。

⑤ この解釈はどう読んでも成り立たない。なぜなら、『資本論』では、前回引用したように、訳本の表現により微妙な差はあるが、「価値対象

性」を「どうとらえたらいいかわからない」という事と、フオルスターフが「どうとらえたらいいかわからない」と言った「対象」であるクイックリー夫人を「とらえる」事とは「異なる」「区別される」「違う」と書いているのである。

⑥「ヘンリー四世」におけるクイックリー夫人の役割に関する私の感想は、決して「いかがわしい居酒屋のいかがわしい女」と読み取ることとは出来なかった。たしかにやり取りにはきわどい表現が次から次へと聞こえてくる。しかし、物語の本筋を吟味して考えると、クイックリー夫人は戦争によって血にまみれた王権・腐敗した貴族社会を代表するかのような巨漢の無頼貴族フオルスターフにたいする痛烈な反撃のヒロインであり、それはまさに庶民の代弁者として日頃の貴族社会の腐敗にたいするうっぶん晴らしの役割を演じているようにさえ感じられる。このクイックリー夫人の役割はヴェルディ作曲のオペラ『ファルスタッフ』（下の写真は一九九九年英国ロイヤル・オペラによる上演に登場したファルスタッフ、歌



手はプリン・ターフェル）ではより一層鮮明になっており、すべての場面で、ファルスタッフを「お仕置き」するための陰の主役となっている事でも明らかではないだろうか。

では、マルクスの真意を明らかにするポイントとは、どのような事柄であろうか、

今まで詳細に検討してきた『ヘンリー四世』の中心テーマとマルクスが『資本論』で力説したかった点を対比させ考えてみると、一つは「価値対象性」が読者にとっては「どうとらえたらいいかわからない」のではないかという心配であり、もう一つはフオルスターフが「どうとらえたらいいかわからない」と悔し紛れに悪罵した当の相手（対象）であるクイックリー夫人を「フオルスタ

ーフがとらえる困難」の問題である。そしてマルクスははっきりと、二つは「区別される」と書いていたのである。

後者の問題は実に簡単で「クイックリー」に解決される問題にすぎない。フォルスターフの発した「どうとらえたらいいかわからない」というセリフは追いつめられた上での言掛りであり、「川獺（両性類のようにみえる哺乳類）」＝「男か女かわからない」という意味だとしても、クイックリー夫人と王子の言明によって即座に底が割れてしまう。また、前掲の『NHKシェークスピア劇場 ヘンリー四世』での解説文によるとフォールスタフのくだんのセリフ「were to have her」は「how to take her」と同義「どうとって（抱いたら）いいか、さっぱりわからん」という意味もあり、それに対するクイックリー夫人の「were to have me」は「わたしの抑え込み方なんぞよく知ってるくせして」と紹介している。（『NHKシェークスピア劇場 ヘンリー四世第一部』七九～）

そのようにいわば「裏の意味」で解釈するとし

ても、「どう押さえ込んでいいかわからない」というセリフに対して「能くもそんな事が言えたものだ、お前さんだつて誰だつて、私をいつも良いようにあしらっている癖に、このごろつきめ！」と、まさに「対象」であるクイックリー夫人の一撃で反論され、「どうとらえたらいいのか」などとは言えないほど簡単に「まっとうな女なんだから」という事が証明されてしまうのである。

これに対して労働生産物である商品に備わっていて、何人にも即座にわかる使用価値と交換価値（価格）とは異なり、交換価値の内実を成す「価値」（抽象的な労働の分量）を「読者の認識が正確にとらえる」事は、（マルクスにとっては『資本論』を著述する時点で、すでに人類史上初めてとなる科学的証明を終えているのであるが）、一筋縄ではいかないのである。こうなるとやはり、マルクスの語る『「価値対象性」を理解することの困難』、についてさらに検討を加えなければならぬであろう。

また、また続くことになってしまった。